

比叡山延暦寺名所圖絵本館蔵

大津市制100周年記念展のお知らせ

明治三十一年（一八九八）十月一日、大津町に市制が施行され、大津市が誕生しました。本年はそれからちょうど一〇〇周年の、記念すべき年にあたります。

歴史博物館では、本年、この一〇〇年間——明治、大正、昭和——の大津市民の歩みを、さまざまな資料で、さまざまな角度から振り返ろうと、三回の展覧会を企画しました。第一弾は、二月三日から三月一日まで開催した特別陳列「大津の映画館」展で、市民に身近な映画館の歴史を、資料と映画の上映会で回顧しました。おかげさまで、特別陳列は盛況裡のうちに終えることができました。今号の「歴博だより」では、続く第二弾と第三弾の展覧会について紹介します。

第二弾は、夏休み期間中の八月四日から三十日まで開催する企画展「大津の鉄道百科展」です。本展では、明治以降、貴重な市民の交通手段として、また大津市の発展に大きく寄与した「鉄道」に焦点をあてます。国道（現JR）、京津電車軌道と大津電車軌道（現京阪電鉄）、江若鉄道など、いずれも市民の方々の胸に、深く思い出に残るものでしょう。特に夏休みということとで、小中学生向けの親しめる展覧会となるよう、様々な趣向をこらす計画です。

また九月三十日から十一月十五日までは、第三弾として「大津市民の一〇〇年」（仮称）を開催します。本展では、市民生活に視点を据え、一〇〇年間の生活習慣や生活用具の変遷、本市の風景の移り変わりなどを、身近な庶民資料によって紹介します。いずれの展覧会も、現在準備調査を進めている段階ですので、只今資料や情報を広く募集しています。ご協力の程、よろしく願います。

大津市制一〇〇周年記念企画展

大津の鉄道百科展

会期

平成十年八月四日(火)～八月三十日(日)

大津市制一〇〇周年記念展の第二弾は、大津の鉄道に関する展覧会です。明治十三年(一八八三)京都から大津間に東海道線が開通、大津に初めて鉄道が走りだしました。その後、大正になると、京津電車軌道や大津電車軌道(現在は京阪電鉄大津線)、また大津と湖西をむすぶ江若鉄道など、大津の町には次々に鉄道が敷設されてゆき、市民の貴重な交通手段として利用されてゆくこととなります。現在では、江若鉄道も湖西線に代わり、また昨年十月には、京阪電鉄京津線も京都市営地下鉄東西線に乗り入れるなど、鉄道やそれを取りまく風景も日々、様変わりしています。本展では、市制一〇〇周年を節目として、人々に親しまれてきた鉄道のあゆみを懐かしい風景写真や映像、当時の沿線案内などの関係資料により振り返るものです。

また、会期は夏休みにあたることから、大津を走った懐かしい車両の模型の走行や、逢坂山トンネルなどの大津の鉄道史跡の見学会など、子どもたちにも親しめる展覧会になるよう、現在計画しております。ご家族連れでお越しいただき、大津の鉄道交通のあゆみを世代を越えて語り合っていたければ幸いです。

詳しい展示の内容は、次号の「歴博だより」でお知らせしますが、展示を予定している作品や写真を少し

だけ紹介します。

表紙の写真は、大正から昭和にかけて活躍した吉田初三郎が描いた「比叡山延暦寺名所圖絵」です。これは、伝教大師千百年大遠忌が延暦寺で行なわれたことを記念して、昭和十年(一九二二)に比叡山御遠忌事務所から発行された比叡山を中心とした鳥瞰図です。この遠忌は、その年の三月十六日に行なわれましたが、

江若鉄道は前日の三月十五日に三井寺下から叡山間の営業を開始し、参詣者の便をはかりました。そのため、江若の路線はここには叡山までが実線で示され、それ以降の部分は点線になっています。

写真1は、国道一号线を一六一号線の分岐点のあたり、関寺の踏切の写真です。この写真は、昭和三十年頃のもですが、写真中央の橋の下には、昭和四十六年に廃止された、上関寺駅のホームが写っています。また、写真の電車は昭和九年に登場した日本最初の流線形連接車「びわこ号」です。この頃には京津線のみを走っていました。登場当時は、天満橋から浜大津間を直通で七十二分間で結び、琵琶湖観光の連絡特急として活躍しました。

また、写真2は京阪電鉄の三五〇型車両の運転台です。この車両は昭和四十一年に製造され、石山寺から坂本間を走っていましたが、昨年の十月に京都市営地下鉄東西線が開通し、新しい車両が増えたため、廃車になりました。これは、実際に触っていただき、運転手の気分になっただけのようにと考えています。

展示資料はその他にも、鉄道のあゆみをものごたる資料や写真、また江若鉄道から車外を撮影した貴重な映像など、盛り沢山です。御期待ください。

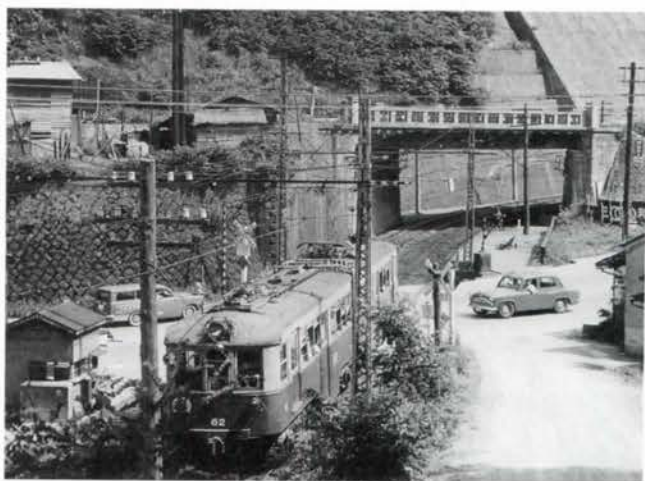


写真1 上関寺付近の様子

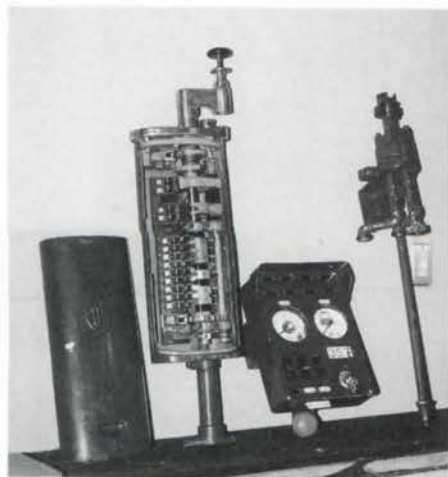


写真2 京阪電鉄の運転台

市制一〇〇周年記念特別展

大津市民の一〇〇年

会期

平成十年九月三十日(水)～十一月十五日(日)

本展では家族や親子に視点を置き、明治から大正、昭和にかけて、家族のなかの様々な面で、生活スタイルがどのように変化してきたのかを、懐かしい生活用品や古写真などによって紹介します。

たとえば洗濯風景ひとつをとっても、かつて琵琶湖の湖畔で洗濯をしていた時代から、洗濯機が登場する時代に、娯楽面でもラジオからテレビ、ステレオの時代に、また夏と冬の生活にしても、氷柱や火鉢から現在の冷暖房器具まで、というように・・・昭和三十年代の電化製品(いわゆる三種の神器)の登場によって、生活スタイルは一変します。写真3は、そんな頃



写真3

のサンヨーの洗濯機が写っている懐かしい時代の一コマです。人物の右手に木製のたらい、左の棚にブリキのバケツが写っています。当時はどこの家庭の台所や洗濯場も、このような風景でした。三十年代前半で、洗濯機が約三万円、冷蔵庫が約七万円。その頃のサラリーマンの平均月収が二万七千円くらいだということです。これらの電化製品はかなり高価なものだったのです。

以上のような家庭生活の変遷とともに、市内の風景の変遷についても地図や復元模型、古写真などによって跡づけていきたいと計画しています。

戦後、湖畔の埋め立てが順次実施されていき、近年は、湖畔も「なぎさ公園」として整備され、琵琶湖の水に親しめる市民の憩いの場となっています。写真4は昭和二十六年の湖畔を撮影した航空写真です。写真の右上方に湖南町(現島の関、中央小学校の北側)の埋め立て地がすかに見え、そこから東南方向(写真手前)に、埋め立て整備途中の湖岸道路が伸びています。また小さく、大津警察署の旧建物なども写っています。左側に伸びる現JR琵琶湖線との間の、馬場一、二丁目付近には、人家がまだまばらであったことが分かります。本展では、このような市内の全域にわたる景観の変遷を、地図と写真を組み合わせることによって紹介するとともに、かつて点在していた銀行などに代表される近代建築についても焦点を当てたいと考えています。

この他、戦時中の銃後生活や戦後の進駐軍時代の写真や遺品など、戦前戦後の渦中のなかでの家庭生活をとりあげたり、買物風景という視点から、商店街の

移り変わりや物価の変遷を分かりやすく紹介するなど、皆さんの身近な話題を素材として、一〇〇年の歩みを振り返りたいと思います。

* * *

以上に紹介しました鉄道百科展と市民の一〇〇年展に展示する資料を現在募集しています。皆さん方が使われていた身近な生活資料や古写真、電車の時刻表や切符など、一〇〇年の変遷を知る資料でご家庭に眠っているものがございましたら、歴史博物館までご一報ください。資料とともに、市民の思い出話なども広くお聞きしたいと考えています。担当の学芸員がお邪魔しますので、何卒よろしくお願ひします。



写真4

学芸員のノートから⑩

「近江大津宮」京城研究

大津宮の京城については、発掘調査が本格化するかなり以前から、多くの研究者たちが取り組んできた。しかし、大津宮の解明を目的とする発掘調査が行われるようになった昭和五〇年代以降になると、むしろ大津宮には京城は伴っていないかという研究成果が報告されるようになり、「京城」研究は停滞してしまつたというのが現状である。

はたして、それでよいのだろうか。確かに大津宮や周辺地域の発掘調査では、「京城」の存在を直接示すような遺構（道路跡など）の発見はなく、それを積極的に主張する資料はほとんどないといつてよい。しかし、近年の発掘調査の増加で、大津宮時代の遺跡の存在が少しずつではあるが明らかになりつつあり、わずかではあるが「京城」に相当するような区域が存在する可能性はあると考えている。現在、その可能性を求めて、各分野での資料収集及び検討を行っており、ここで、その現状を報告する。

(一) 「京城」研究史

大津宮の「京城」に関する研究は、明治三四年に発表された木村一郎の論考に始まるといわれている。以降、喜田貞吉、田村吉永、米倉二郎、福尾猛市郎、戦後では藤岡謙二郎、秋山日出雄ら、当代を代表する古代史や歴史地理分野の研究者が諸説を発表している。その内容は、規模の大小はあるが、おおよそ大津宮を

中心に、その南側一帯に藤原京や平城京などと同じ条坊を想定している。だが、大津宮の発掘調査が開始された昭和五〇年代以降、「京城」研究に新たな流れが認められるようになってきた。

すなわち、昭和五〇年代以降、京城論の主流となつてきた「京城」否定説とは異なり、一般的にいう「京城」ではなく、これに代わる大津宮のあり方を模索する論考が出されるようになってきた。その代表的な例が、「点と線の都」という考え方（田辺昭三）であり、「大津宮を取り囲む四寺院の性格」に関する論考（林博通）だといつてよいだろう。

ここでは、この両者の考え方に全面的に賛成する立場にたつたのではなく、別の角度から検討を行い、大津宮を中心とする一つのまとまりをもつ区域が設定されている可能性を追求し、最終的には、それを立証しようとするものである。

(二) 方法論

先の可能性を立証する方法として、いま、四方向からのアプローチを検討している。①は、考古学の分野で、従来から取り上げられている滋賀郡における白鳳寺院の分布からのアプローチであり、②は、民俗学の分野から、天智天皇に関する伝承地の分布を取り上げる。③は、地理の分野からのアプローチで、滋賀郡の地形に注目したものである。最後に、④は、古代の文献史料からのアプローチである。

① 考古学—白鳳寺院の分布—

先にも述べたように、大津宮を取りまく四寺院については、宮を防御する性格を兼ね備えた寺院として配置されたとする考え方がありますが、これを大津宮周辺と

いう限られた範囲ではなく、滋賀郡全体に目を向けて白鳳期の寺院の分布を検討していくと、坂本から石山寺の地域に集中して分布する傾向が顕著に見られる。加えて、当時の古道との関連性を重ね合わせると、いずれの寺院も交通の要衝に立地することが指摘できるようである。

② 民俗学—天智天皇伝承地—

大津や、壬申の乱の舞台となった土地には、天智や天武・持統、さらには大友皇子に関する伝承地が数多く残っている。伝承地については、その成立に不明なものが多く、史料として使用することは危険だとする考え方が強いと思うが、成立時期は別にして、そこに伝承が残るといふ事実は無視することはできない。ここでは、大津宮に最も関わりの深い人物である天智天皇の伝承地の分布を、近江及びその周辺地域、特に滋賀郡を中心にその分布状況を取り上げてみた。その結果、滋賀郡、なかでも坂本から石山寺の地域に集中していることがわかる。これ以外には、蒲生郡日野町に一箇所、山科から宇治にかけての地域に若干分布する程度である。

③ 地理学—滋賀郡の地形—

琵琶湖を取りまく周辺の地形を見ていくと、湖を挟んで東と西では大きな違いを見ている。湖東地域は野洲川、愛知川、日野川などがつくりだす沖積平野が広がっているのに対し、湖西地域は南北に延びる比良・比叡山系の山並が湖岸近くまで迫り、ほとんど平地らしい平地は認められないといった状況である。その南端に位置する大津の地は、比良・比叡山系の前面に広がる滋賀丘陵及び瀬田川により、さらに三つの区域に分けられる。一つは瀬田川以東の比較的平地が広

がる区域、次に坂本以北の滋賀丘陵が湖岸近くまで迫っている区域、そしてこの両者に挟まれた区域。最後の区域、すなわち坂本から石山寺の地域は、小河川が造り出すゆるやかな扇状地とその前面に広がる小さな沖積地が続くという地勢を呈しており、北の木の岡丘陵と南の伽藍山を押さえれば、周囲から完全に独立した地域と成りえる。

④文献史学―古代渡来系氏族の分布―

滋賀郡居住の渡来系氏族については、岸俊男や水野正好らに代表される論考があり、早くから研究が進められている。郡内の氏族分布については、北の真野郷と南の三郷（大友・錦織・古市郷）との間に顕著な差が認められ、後者に渡来系氏族が集中して居住することとはよく知られた事実である。だが、今、この南の三郷に居住する渡来系氏族の分布に、古墳時代後期から大津宮遷都前までの時期（六世紀後半―七世紀後半）の遺跡・遺物の状況を照らし合わせてみると、三郷の中でも北の大友・錦織郷と南の古市郷との間にも大きな違いの存在が指摘できる。すなわち、大友・錦織郷には持ち送り技法で構築されたドーム状の天井をもつ横穴式石室が集中し、内部にはカマド・カマ・コシキ・ナベの四点をミニチュアで作った炊飯具形土器が多く副葬されているのに対し、古市郷には、園山古墳群にわずかにドーム状の天井をもつた横穴式石室が見られる程度で、しかも古墳の数も大友・錦織郷に比べ極端に少ない。ミニチュア炊飯具形土器にいたっては、現在のところまったく出土せず、六世紀から七世紀にかけての集落遺跡も確認されていない。これらの事実から判断して、古市郷は大友・錦織郷に比べ、開発が

遅れ、七世紀でも中頃に降から本格的に開発が進んだと考えられ、同郷に居住する「大友但波史」一族も、この時期に移住（大友・錦織郷の「大友村主」の一部が移住）してきた可能性が強いといえる。その時期は、まさに大津遷都の直前にあたり、「大友但波史」の移住がこの遷都を睨んで行われたと見ることもできる。

(三) 結論

簡単に、四つの異なる分野から、大津宮を中心とする周辺地域の状況を見てきたが、その結果、七世紀後半の時期、坂本から石山寺の地域が一つのまとまりをもった区域として意識されていた事実が浮かび上がってきた。地形的に見て、木の岡丘陵と瀬田川・伽藍山を押さえれば、前面に琵琶湖が広がり、背後に比叡・音羽山系が聳えていることから、一つの独立した区域になりえる可能性をもつといえる。ここに大津宮を中心とした、宮を防御する性格を強くもつた区域が設定されていたと考えられ、これを、従来の「京城」とは性格を異にすることから、「外郭」という名称で呼びたいと思っている。ご意見・ご批評を頂ければ幸いです。

なお、いままで述べてきた内容の詳細については、本館研究紀要（五）に「近江大津宮新「京城」論」と題する報告を載せているので、ご一読下さい。

（松浦俊和）

映画上映会行っ

大津市制一〇〇周年記念展覧会の第一弾「大津の映画館」の関連講座として、なつかしい映画の上映会を行ないました。上映作品は「伊豆の踊子」、「類猿人ターザン」、「鞍馬天狗―黄金地獄」の三本で、いずれも一〇〇名近い方々にご覧いただきました。

今の映画館では、パンフレットはカラー刷りの立派なものも販売されていますが、戦前には一枚ものの簡単なものが配られていたようです。そこで、当日はパンフレットとして「歴博館通信」を特別に発行、体裁も戦前のパンフレットに似せたものを制作し、雰囲気盛り上げました。

日一廿月六年新成平

大津市立歴史博物館

ターザン

ジャコブ・ワイルドマン

エドワード・グロウ

一九三二年 日本映画

類猿人ターザン

TARZAN, THE AP E MAN

一九三二年 日本映画



ターザン

ジャコブ・ワイルドマン

エドワード・グロウ

一九三二年 日本映画

類猿人ターザン

TARZAN, THE AP E MAN

一九三二年 日本映画

れきはくインフォメーション

7月		6月		5月		4月			
土	11 第58回親子歴史講座 10時～11時30分 講師 松浦俊和(本館学芸員)	土	20 心斎橋 盛安寺 穴太の歴史をたずねて 10時～11時30分 講師 横谷賢一郎(本館学芸員)	土	16 第154回土曜講座 「船奉行」 13時30分～15時 講師 高島幸次(夙川短期大学助教授)	土	25 第152回土曜講座 日本のおし文化と近江のフナズシ 13時30分～15時 講師 日比野光敏(市野学園短期大学講師)		
土	4 心斎橋 天津歴史教室 葛川 渓谷に文化財を訪ねて 10時～11時30分 講師 松浦俊和(本館学芸員)	土	27 心斎橋 天津歴史教室 町並み博物館通りを歩く 10時～11時30分 講師 横谷賢一郎(本館学芸員)	日	6 心斎橋 天津歴史教室 小関越の古道を歩く 13時30分～15時 講師 山下 立(滋賀県立琵琶湖文化館学芸員)	土	2 第153回土曜講座 仏像の胎内をさぐる 13時30分～15時 講師 岩田茂樹(本館学芸員)		
土	11 第58回親子歴史講座 10時～11時30分 講師 松浦俊和(本館学芸員)	土	20 心斎橋 盛安寺 穴太の歴史をたずねて 10時～11時30分 講師 横谷賢一郎(本館学芸員)	日	6 心斎橋 天津歴史教室 小関越の古道を歩く 13時30分～15時 講師 山下 立(滋賀県立琵琶湖文化館学芸員)	土	9 第56回親子歴史講座 紙でつくったアニメのからくり 10時～11時30分 講師 木津 勝(本館学芸員)	土	23 第155回土曜講座 江戸時代の湖上交通―石場・小舟入・矢橋― 13時30分～15時 講師 中森 洋(本館学芸員)
土	4 心斎橋 天津歴史教室 葛川 渓谷に文化財を訪ねて 10時～11時30分 講師 松浦俊和(本館学芸員)	土	27 心斎橋 天津歴史教室 町並み博物館通りを歩く 10時～11時30分 講師 横谷賢一郎(本館学芸員)	日	6 心斎橋 天津歴史教室 小関越の古道を歩く 13時30分～15時 講師 山下 立(滋賀県立琵琶湖文化館学芸員)	土	16 第154回土曜講座 「船奉行」 13時30分～15時 講師 高島幸次(夙川短期大学助教授)	土	25 第152回土曜講座 日本のおし文化と近江のフナズシ 13時30分～15時 講師 日比野光敏(市野学園短期大学講師)

*親子歴史講座は小学生とその保護者が対象です。
*いずれの講座も、ハガキでご応募ください。

収蔵品紹介 ③

皆川淇園七回忌追善寄合花鳥図 一幅
絹本着色 一三八・〇×五四・八 本館蔵

三〇号では、流派を越えた絵師同士の交流の証となる幕末の寄合(合筆)作品を紹介しましたが、本館には同様の作品がもう一件収蔵されています。それがこの作品です。画面下部には制作経緯(識語)が記されていますが、それによると、文化一〇年(二八一三)に行われた皆川淇園の七回忌の法要に際し、生前淇園と交友のあった絵師達が集って追善供養としたものとわかります。淇園は単なる儒者にとどまらず、江戸中期後半における京都文化人のリーダーでもあり、当時を代表するタレント学者として華々しい活躍をみせた人物です。この追悼作品は、生前の淇園を偲ぶ絵師達の粋な趣向であり、彼の人脈を物語る寄せ書きといえます。即席で画面を氷列に区切り、全部で十五名の絵師が各コマに絵筆をとっています。絵師の内訳は、松村景文・蝙蝠/岡本豊彦・山水/長沢芦洲・蒿薇/円山応瑞・藤/土岐濟美・鳥/佐々木大寿・土筆/八田古秀・椿/円山応震・南天/奥文鳴・亀/山口素絢・麦/西村楠亭・梅/岸 岱・菖蒲/河村琦鳳・蜻蛉/原在明・蝶蛾/狩野永俊・稲、となっています(識語は皆川允)。流派別に絵師をみると、当時最大勢力の円山派が九人とその五分の三を占めています。他の岸派・四条派・原家・京狩野家が二名か一名であるのに比べ、淇園と親交を持った応挙の門人達が優遇されています。(横谷賢一郎)

